

毎年12月17～19日に東京台東区の浅草寺で開催される歳の市（羽子板市）。その会場で授与される新名物に「有卦干支羽子板」があります。名前につけられた「有卦」という言葉は一体どのような意味を持つのでしょうか。今回は歳の市羽子板市の季節の前に「有卦」について調べてみました。

節句人形
素村がギモン



浅草寺歳の市の有卦干支羽子板



一藝齋芳富画
『辛酉八月五日木性人有卦二入』
【上州屋重七】文久元(1861)
国立国会図書館デジタルコレク
ション

吉凶を知る有卦無卦とは？

「有卦に入る」という言葉がある。「うけにいる」と読み、幸運をつかむ、良いことが続くという意味の慣用句だ。有卦とは陰陽道に基づく考え方で、干支による運勢が吉運となる年廻りのことを指す。吉年のことを有卦、凶年のことを無卦^{むげ}といい、有卦と無卦は12年周期で繰り返すと信じられ、有卦に入ると7年間幸運が続き、その後は凶年の無卦が5年続くと考えられた。

陰陽道は古代中国の陰陽五行説を基盤にしているが、日本では独自に発達し、江戸時代には庶民に広く浸透し、生活全般に入り込んでいた。江戸から明治にかけて、人々は陰陽道の五行思想（木・火・土・金・水）に基づいて、その人の生まれ年

の納音^{なっちん}によって、人を木性・火性・土性・金性・水性に当てはめて、有卦と無卦を判断して吉凶を知り、有卦入りを祝った。

では有卦無卦の判断の基準となる干支^{えと}とはなんだろうか？ 干支は十干^{じっかん}と十二支の組み合わせからできており、十干の「干」と十二支の「支」とって干支と読む。現在は十二支が干支だと思われているが、本来の干支は暦の十干と十二支を組み合わせたもので、全部で六十あり、それぞれに意味を持っている。ちなみに、人が六十歳になることを「還暦を迎える」というのは、60年で干支が一回りすることに由来する。

幸せを願う有卦絵の流行

有卦にまつわる風習に「有卦絵」がある。有卦絵とは有卦に入ったことを祝うために人々が飾った浮世絵や錦絵のことで、めでたさをあらわすために描かれた有卦絵は、江戸時代後期から明治初期にかけて流行し、贈り物としても喜ばれた。有卦に入った人には、福に通じる「ふ」が頭に付くものを贈る風習があったため、有卦絵のモチーフにも富士山、福祿寿、福助、福女、藤、蓆、福牡丹、福寿草、筆、二見浦、袋、ふくさ、ふくべ（ひょうたん）、船、笛など「ふ」が付くものが描かれた。

有卦舟という縁起物もあった。有卦舟は帆柱を筆で、船体を紙や経木で作った舟の上に、二股大根や富士山など「ふ」が付くものをかたどった菓子を載せて売られた。また、有卦入り後の一月以内に「ふ」の付く場所七カ所をまわる「有卦入七福めぐり」という習俗があったことも史料に記されている。

2025年の干支は乙巳（きのと・み）。来年の自分の運勢は有卦か無卦か。有卦ならばおめでたいし、無卦なら気を引き締める。こうして新しい年の運勢を知り祝いたい気持ちは現代人にも通じるだろう。